<研究ノート>

生活意識論

——有賀喜左衛門の学説の覚書——

米地　実

有賀喜左衛門の初期の研究であり，1933年1月末より2月末にかけて「法律新聞」に連載された，「捨子の話」をみると，当時の有賀にとっては「生活意識」と表現される事柄が関心の土台，最も主要な核となっていたことが分かる。この「生活意識」を原点として有賀の研究は進められていったと思われる。

すなわち，有賀は日本人の生活意識の解明を通じてこそ日本人の生活が把えられるのだと考えていたようである。それは生活意識に生活の総合性が示されるのだという考え方であった。換言すれば，一見連関のないと思われる諸社会現象を統一的に把握する一方法として生活意識が位置づけられていたからであろう。後の研究成果では「生活意識」という表現は表面にあらわれることは少なくなるが，生活を総合的に把握することを目的とした有賀の研究活動の底流として存在している。

この1933年当時の有賀の研究についての有賀自身の評価について後に筆者が尋ねたとき，有賀は当時自分の研究の方向はつかんでいたとのことであった。「名子の賦役」の完成が有賀の研究活動の一画期であったことは有賀の研究活動歴からも明白である。「捨子の話」は「名子の賦役」の完成後の著作であり，初期の研究であり，それも有賀が研究の方向を得た時期の著作であったからこそ，後に続く研究の問題意識・研究主題が露頭していたとも考えられるのである，すなわち後に成果として示された研究の枠組が最も端的な形で示されていたというように考えることができよう。一人の人間が一生の間に解こうとする問題はそれ程多くはない，その解答を求めねばならないという問題が見出されたとき，あるいはこれが問題であると考えたときに，その人間の研究活動はその解答を得るための長い人生の行程ともなるのである。

研究成果が累積されてゆくにつれて，当初把んだ問題は表面から底へ底へと沈潜してゆくが，それは人間の内面から決して消え去るわけではない，沈潜してゆきながら他の事柄を外被として纒ってしまうのである，従って，大きな業績を残し得た人びとの初期の研究をその人の研究関心，問題を知るための素材として分析する必要があるのだと考えている。

また晩年の業績の蓄積が大きければ大きい程，初期の問題意識がそれに耐れ得たという意味でその初期の問題意識を後学は理解し，学びとってゆく必要があると思われる。

有賀は次のように生活意識を把えている。

> 生活意識といのは生活に存する心持とか考え方というほどの意味でありますが，生活意識はその社会が持つ組織や生活條件から滲み出てくるものでありますから，その社会生活を理解するためにはどうしても考えられなければならないのであります，それで私達がわれわれ民族の生活の歴史を明らかにしようとする場合にはわが民族の持つ生活意識を知ることによってその理解が深められるのであります」（XIII 360頁）。

すなわち，ここに示されている有賀の考え方は，①社会生活や民族の生活の歴史を理解しようとすると，わが民族の持つ生活意識を知らねばならない。②個人は全体に規定される。③個人は個人の生活する社会組織や生活條件に規定された生活意識を形成する。④個人意識を規定している社会意識や生活條件を個人意識を媒介として理解する。

このような簡単な引用では有賀の思考体系における「生活意識」に関する位置づけは理解し難いと思う。有賀は一見しただけでは脈絡の見出せない諸社会現象を一つの統合された全体として把えるために生活意識を媒介として把えてゆくという方法をとるのである。

> 捨子の事件がいかなる生活事実と関連するかを考えて見ようともせぬのが普通なので（VIII305－6頁）有賀は個々の慣行をめぐる。

> 生活意識を辿つてゆけば連関した事柄であった

ということである。　（Ⅷ360頁）

以上説くように，個々の一応別個のものと思われる諸慣行が，その慣行を内面化している人びとの生活意識の内では一つのまとまりを持つものとして存在することを指摘する。すなわち，生活意識という人びとの全体性の存在の中に生活を規定する社会諸現象間の統合を見出すのである。次いで有賀は意識と現実行為の間には一定のズレのあることを問題にする。

生活意識というものは生活資料が変わるほどに大きな変化をするものではないことがわかるのであります。　（Ⅷ361頁）

という認識を前提とする。さらに有賀は生活意識，習慣，生活資料を生活の諸條件が一定の意識のもとに統合されるとそれが一定の慣行となるという関連付けを考える，すなわち様式化された人間の行為というものを考えるわけである。さらに様式化された人間行為と生活意識，習慣，生活資料のそれぞれに一定のズレが生みだされるという考えの上に立って，次のように述べる。

従ってわれわれは現在の生活にある種々な層の生活意識を知ることによって，かなり古い時代の生活意識やそのまた変遷してきた様子を推察することができると思うのであります。（Ⅷ361頁）

生活意識の多様性を媒介にして生活意識の変化相も把えうることを指摘するわけである。

現実の生活においてこの生活意識は生きて働いているのであります。（Ⅷ361頁）

以上のように把え，歴史研究における現在資料（現在の意識において統合されている）の意味についてのべる，さらにこの「生活意識」をわれわれがどのようにして資料化するかの方法について次のように説く。

生活意識を会得するにはどうしても現在の現実の生活の中から〔書物などでない〕学ばねばならないのであります。　（Ⅷ361頁）

有賀は同じ文脈の中で，

それはその生活の中に生活意識の伝承される相があるからであります。（Ⅷ361頁）

このことの意味についてはよく分からない，この場合にいう「生活意識の伝承される相」という表現は現在の生活意識のある側面とするならば新旧の生活意識がそれぞれとして併存していると理解せねばならないのであろうか，このように理解することの誤りは明らかであろう，なぜならば生活意識は統合性をもつからである。諸々の生活意識が異なった人びとに存在することは通常あり得るが同一人においてはありえない，従ってこれはその生活の中に一定の慣行，あるいは行動様式として，現在は変化してしまった生活意識の伝承される相があると理解すべきなのであろうか，その慣行，あるいは行動様式はあくまで，現在の生活意識によってまとめあげられているのであり，そこに現在があるのである。

有賀はその研究行程を一貫して「生活」の把握を追求してきた。有賀にとって，生活とは単なる衣食住のそれぞれの側面を指すものではない。衣食住が具体的に統合され実現されたものが生活であった。

例えば人間は衣食住の資のみ有すれば生き得るが，その他の要素のみでは生き得ないとの理由によって，生産関係を最も重要視するとする。しかるに衣食住が生活として存するためには，衣食住の実現する形態が伴うものであって，すなわちこの形態を通してのみ衣食住は実現するのである。（Ⅷ210頁）

従って有賀はここで衣食住というのは一つの文化の表現として存在し，それを離れた衣・食・住，すなわち生活の諸側面がそれぞれ単独に存在するものではないことを強調する。有賀はさらに続ける。

単に生命を維持するための衣食住の概念を考えることは出来たとしても，これはまったく抽象的な観念にすぎない。衣食住が生活として存するためにはその社会的條件を投影する衣食住の現実にあらわれた形態とともに不可分離の関係においてでなければならない，例えば民族によって衣食住の形態の異なることはそれぞれの社会的條件（文化）によってその表現が創造されるに至ったからであり，この表現こそ生活であることを考えなければならない。（Ⅷ210頁）

以上は今日的に表現すれば衣食住は文化によって規定されている，あるいは衣食住が文化として現われたときにそれは生活になるのだということであろう。さらに筆者なりに理解した表現をもってつけ加えると，衣食住が一つの具体的な形態をもって現われるところに生活というものがみられるのであって，生活の中から抽き出された衣食住はそれ自体生活を

構成する素材ではあるが生活それ自体ではないということである。すなわち生活とはもろもろの素材が一つのものとして総合性，統合性をもって存在するものであり，生活自体は諸側面（諸素材）において把えられるとしても，把えられた側面それぞれは生活ではないのである。

生活を構成するためには諸側面は何によって統合されるのかということが改めて考えられねばならない。既に触れたように有賀は，

その生活の全体を表象するものはその生活の意識である。だから例えばその信仰がその生産関係と不即不離の関係を保つということは，決して生産関係が信仰の形を決定するからではなく，（逆に信仰が生産関係を決定するからでもなく）その生活における生産関係も信仰もその生活意識の統合において存在するからである。（Ⅷ210頁）

生産関係も信仰もともに生活を構成するそれぞれの側面であって，それらが人間の営為である生活として実現されるためには生活する人間の生活意識の統合があるからであると説くのである，生活の各側面が全体として統合されるには生活意識が媒介とならなければならないのである。すなわち前に触れたように有賀は「意識」を生活把握という局面に積極的に登場させるのである。

われわれの生活の進展においてその新しい形が生まれるためには，われわれの意識の積極的な創意を必要とするものであるが，これがための素材は既存の生活条件にほかならないから，古い生活条件がつねに新しい生活組織を拘束するものである。言い換えれば生活の進展は古い生活意識の展開において行なわれるものであって，われわれが新しい生活条件を選択する場合においても，この選択は一面においてその生活の既存の条件に適合するような仕方において行なわれるのである。すなわちわれわれはたえず新しい生活資料によってその生活条件の展開を求めながらも，それを古い生活意識に適応せしめようとする努力をやめないのである，これをさらに言い換えるならば生活意識なしには生活条件の統合は存在しないのであって，すなわちそれなしにこれら生活条件を生活として実現することが不可能なのであるから，生活意識が生活の次の展開を決定するというのは至当である。

したがって生活現象におけるいかなる部門の究明も，生活意識の本質に関する明確なる見透しなしには可能でないにもかかわらず，従来の観察の多くは生活條件の外面にあまり多く捉われていたので，綜合的な考察の必要が感ぜられていた割合には研究の成果に欠けるところが多かった。——現在における合理観をもってその歴史を考察しようとしても深い理解の得られるはずはないのであって，今日においてはまず何よりも研究の方法における欠陥を除かねばならないのである。（Ⅷ211頁）

有賀は以上のような考え方を基礎に具体的に小作慣行を把え分析したのであったが，ここではその具体的な小作慣行の展開を跡づけることはさけて，有賀の分析方法を把えるということに焦点をあてたい。

有賀は従来の外面的な観察の方法からはできるだけ離れて，すなわち具体的小作関係は一定の小作形態をもつが，それらの形態が現実に存在し，彼らの生活として存する場合には，それらが彼らの生活意識に媒介されて生活として表現されるということから，とうぜん小作の観念についての考察を目標とした，すなわちこれは従来の一般の対象への接近方法を転換させるということを意味する。これは対象の内面——外面を結びつけての一つの統合体たらしめていると有賀の考えているもの——の考察を中心におくということであり，小作が現実として存在する場合にそれがどのような生活意識に基づいての行為であるのかという研究の視点が設定されるのである。それは小作慣行におけるその多様な形態を分類してみるだけでは新らたな混乱を生むにすぎないし，結局は何も得られないという理解があるからである。

有賀の考察の中心はそれぞれの小作形態がどのような生活意識に基づいて成立しているのかを把え，それらを比較する点にあるのであった。これ以外に小作の観念の発展の過程を知る方法はないと考えるわけである。各々の小作形態が現実にそれらが社会関係として存在するがゆえに，各小作形態の観念の吟味が必要になるのである。従ってここでは小作の諸形態と彼らの生活とを統一的に把握するがためにこそ，人びとがそれらの小作関係をどのように意識していたかということの分析が必要になるのである。だからこそ従来のように小作関係の類型を時代的区分に結びつけて把えようとすることは生活現象であ

る小作関係の真の理解からはますます遠ざかることになるのだと有賀は説くのである。だから人びとの生活の一側面として存在する各小作慣行は，それが存在する具体的條件の中に展開しており，それらは彼らの生活の断面であったが故にこそ，それらを生活の中に繰り込んでいる意識を追求してゆかねばならないのである。多種多様な小作慣行を統合するその生活意識を追求してゆかねばならない理由が存在するのであり，かつそれを追求する拠り処もそこに存在するのである。